

～輝き続けながら生きるためには～
「いしゃ先生からのメッセージ」

作家・脚本家 あべ 美佳 先生



1971 山形県尾花沢市の専業農家に生まれる。
2012 尾花沢市のふるさと大使、拝命
2013 やまがた特命観光・つや姫大使、拝命
2014 NHK 東北放送文化賞受賞
《小説》『雪まんま』NHK 出版
『いしゃ先生』PHP 文芸文庫
《エッセイ》月刊誌・婦人の友 2014年8月～
河北新報 他、多数
《脚本》『陽炎の辻』NHK
『お米のなみだ』NHK 他、多数

「いしゃ先生」である、『志田周子(しだちかこ)映画』は故郷を愛する皆さんにとっての“お神輿”なのだと私は思います。時を越え、世代を越え、代々担ぎ続けられる無形の文化財であり、とても高価な宝物です。皆で作上げた“お神輿”は折に触れお披露目され、そのたびに皆さんの誇りとなるでしょう。

その発表の場は、無限大、山形県内の方々に見ていただくのはもちろん、現代も変わらず医師不足に悩んでいる地方の市町村・いわゆる僻地での上映会、志田周子先生のような志高き女性・医師の卵が集中する首都圏での上映、そして世界へ。

志田周子(しだちかこ) 僻地医療に生涯を捧げた女医

周子の故郷、山形県大井沢村(現:西川町大井沢)は、月山と朝日岳の間にある山村で毎年3m以上もの雪で埋まる。その雪が消えるのは5月末である。

その当時の大井沢は、人口が千人。山の中の田畑からは、自分たちで食べる分しかとれず炭焼きや出稼ぎで暮らしを支えていた。山形市からは60km、三山電鉄の終点である西川町間沢からでさえ、23kmも離れていて、「陸の孤島」と言われてきた。そんな村だから、来てくれる医者なんかいるはずがない。

大井沢は長いこと「無医村」だったのである。

医者に診てもらえないで死んでしまう村民の多いことが悔しくて、可哀そうでならなかったのは、当時、大井沢小学校の校長をしていた周子の父、莊次郎だった。周子はその強い願いを受けて東京女子医学専門学校(東京女子医科大学)に入学し、女医としての道を進むことになった。女子医専を卒業し、その附属病院に勤務していた周子のもとへ父が訪ねて来たのは昭和10年の春のことだった。医師として、もっと勉強を続けたい、東京との別れもつらいという気持ちがわかっている父は、「3年だけでいい。大井沢へ、村の人のために帰って来てくれ」と、諭すよう

に頼むのだった。

その年の6月、村に帰って来る決心をして、上野駅から奥羽本線の夜行列車に乗った。山形駅から、左沢線、三山電鉄、バスと乗り継ぎ、月山沢に着くと父が待っていた。ここから10kmは歩くしかない。

大井沢にたどりついたのは、夕暮れ近かった。自然豊かな故郷ではあったけれども、取り囲む山々へ向ける周子の顔は引き締まっていた。「明日から、ここは無医村ではなくなる。その責任はみな、私の肩にかかっているのだわ」周子24歳のときである。

村の医者として生きる決意

約束の3年までもう半年となった昭和13年冬。その日、周子は小学校で子供たちの健康診断をしていた。そこへ、6歳の弟が駆け込んできた。「周子おねえさん、周子おねえさん。お母さんが倒れた。早く来て。」すべる雪道に焦りながら、家に駆け込んだ時、母はすでに息を引き取っていた。

まだ、温かさが残っている母の手をなでながら、周子は唇をかんだ。

「私は、何のために医者を選んだのだろう。母の病
気も見極められないなんて」

残された、6歳、4歳、2歳の弟たち。母を探して泣く下の
2歳の弟を背負って外に出ると、夜空にはオリオン座がま
たたいていた。弟をあやしなから、周子は決心していた。
「幼い3人の弟の母替わりになって、育てていこう。弟にと
って私しかないのだ。」そして「もっともっと医学を勉強
し、二度と母のようなことがないようにしたい」と。周子27歳
の時の事である。

夜中の往診から帰ると、いつもいろりの火を赤々燃やし
て待っていてくれた父。治療がうまくいった時、ともに喜ん
でくれた父。苦しみを分け合った父も昭和25年に亡くなっ
た。周子はこうした悲しみをじっとこらえ、村の人たちのた
めにますます、力を尽くすようになった。

医療に燃え尽きた星

「ふるさとのために、ふるさに生きる」と言ってもその道
は険しく苦しいものだった。父が亡くなったとき、周子は39
歳。村医・校医として村の人たちの命を守り、また婦人会
長や村議会議員として、村の生活の向上を目指し、家に
帰れば、一家の中心としての責任と仕事が待っていた。

その中で、おなかをこわして死ぬ子供、生まれて間もな

い赤ちゃんの死亡、働きすぎで亡くなる若いお母さんなど、
山村に多い病気が大井沢からは年毎に減っていった。
家々を回っての周子の熱心な指導が実を結んだのであ
る。

はじめは学校の先生になりたかった周子は、子供たち
の教育にも力を尽くしてくれた。僻地の教育を良くするた
めに、医療と同じように情熱をかたむけたのだった。

「周子先生にばかり、難儀させてはならない」と、村の人
たちも力を合わせてくれた。「健康を進める会」を作ったの
もその一つである。

昭和34年9月全国保健文化賞の贈呈式が東京第一生
命ホールで行われ、志田周子女医が表彰された。質素な
黒のスーツ姿の周子にカメラマンのフラッシュが続く。ハ
レルヤコーラスの大合唱で式は終わった。走り寄る記者
団に周子は短く答えた。「大変うれしいことです。でも、父
が生きていてくれたら、もっと嬉しかったのに・・・」

それから3年後の7月、周子は51歳の一生を終えた。夜
空のオリオン星を見上げて往診に急ぐことの多かった周
子は、自分もオリオン星となって大井沢の空に召されてい
った。

西山に オリオン星座かかるを見つつ 患家(病人のいる家)に急ぐ 雪路をふみて

志田 周子

志田周子が、志を持って故郷で診療所を開業しても、
「一人前でじゃない女医者に、誰が命をあづけられるか」
と、始めは自分が育った地域の人々から受け入れてもら
えなかった。

女性が職業婦人として働くのが難しかった時代、まして、
医者ともなれば尚更である。

近代医療への偏見や、貧困、国民保険に加入すること
も叶わなかった時代。

病はまじない師頼みで、到底、医者に診てもらおうことが
できなかった。

志田周子は、苦境の中、医師としてしなければならない
ことを見つけ、コツコツと時間をかけて、信頼を積み重ね
ていった。そして、故郷の住民の命を預かるようになった。

『いしゃ先生』の夢は、「何人も等しく医者にかかれる世
の中が来ること。僻地にいても、すべての人が安心して医
療を受けられる日が一日も早く来ること。なぜなら命だけ
は平等だと思っから。」

『いしゃ先生』の話は、昭和の初めの頃、つい80年程前
の事なのです。この『いしゃ先生』のような多くの方が築い
てくださった国民皆保険制度、予防医療、教育などが、今
の私たちに繋がっています。

あべ美佳先生のご講演から、志田周子を通じて、自分
がしなければならない事、女性が生き生きと活躍する姿、
社会の中での女性の立場や環境について、これからの社
会をどう生きていくか等を考える機会になりました。

市民公開講座 座長

山形県立中央病院 佐藤 晴美